

いのちの水

二〇二一年

一月号

七一九号

“だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。(Ⅱコリント 5の17)

目次

- ・ステイホームとリモート
ー キリスト者にとつて 3
- ・旧約聖書における神の友と
キリスト 9
- ・差別・区別・選び
コロナと魂の方向転換 14
- ・報告 16



ステイホームとリモート ー キリスト者にとつて

現在は、世界の感染確認者

は 1月中旬に1億人を越える
と見込まれている。現在の
世界人口は77億人ほどな
ので、世界では平均すると
70〜80人に一人は、コ
ロナ感染確認されたとい
うことになる。

しかし、貧しい国々では感
染確認もなかなかできない
から実際は、これよりずつ
と多くの割合でコロナの感
染が広がっていると考えら
れる。

こうした時代のなか、リモ
ート(*)とステイホームとい
うことが繰り返される

ようになっていく。

(*) remote とは、「遠い」、
例えば、リモートコントロール
(リモコン)

① 距離的に遠い a village
remote from the town 町から遠
く離れた村

② (時間的に)遠い、遠い昔「未来」
の in the remote past [future]
遠い過去「未来」に

(一)で、ステイホームとリ
モートということは、キリ
スト者にとつてどのような
意味を持っているのか、そ
の言葉そのものの意味から
考えてみたい。

ステイ stay は、「留まる」、
例えば、ホームステイとい
う言葉は、外国で、ある家
庭での宿泊食事などを受け

て滞在しつつ語学など学ぶ
ことである。

私たちキリスト者にとつて
は、キリストの内にとどま
ることこそが重要である。

他者のために祈るとき、神
に、キリストのうちにとど
まっていることになる。

けれども、人は、何らかの
苦しいこと、悲しいことが
なければ、真剣に神様のう
ちにとどまろうとしない。

詩篇にある多くの詩も、苦
難からの叫びであり、それ
ゆえにたえず主のうちにと
どまることになっている。

ステイホームは、現在のコ
ロナの状況で繰り返し言わ
れているが、それは単に
「自宅にとどまっているこ
と」であり、子供でも容易
にわかる意味で用いられて
いる。

しかし、私たちキリスト者
にとつては、ホーム home

というのは全く別の意味を
持っている。

Home は、辞書には、「(生
活の場としての)家、わが家、
自宅」の他に、「家庭生活、
生まれ故郷、郷里、本国」
等々のより広く深い意味が
ある。(*)

(*) 例えば、Where's your ho-
me? あなたの祖国はどちらです
か。 のようにつかわれる。

Home に、
a [動物の] 生息地； 原産地、と
いじた意味もあり、the home of +
igers (トラの生息地)。
b [思想・制度などの] 発祥地、本
家、本元 [of] the home of de-
mocracy 民主主義の本家

キリスト者にとつては、こ
のステイホームということ
は、はるか昔、二千年前か
ら、常になされていること
である。ステイホーム、そ
れは私たちにとつては、ホー
ムとは、キリストだからで

ある。

私たちの国籍は天にあり、
とあるように、本当のホー
ムは、天、すなわち神、キ
リストのところである。

主イエスは、言われた。
：我に居れ、さらば我な
んぢらに居らん。

わが内にとどまれ、そうす
れば、私もあなた方の内に
いよう。(ヨハネ15の4)

Remain in me, and I will
remain in you (NIV)

現在繰り返し言われている
のは、単にコロナの一時的
な感染対策としての、ステ
イホームであり、単に自分
の家でいることであるが、
キリスト者にとつては、ホー
ムはキリストであるので、
キリストの内にとどまる
Stay in Christ ステイイ
ンクライスト ということ

になってきわめて重要なこ
とになる。

そして、この世でのステ
イホームは、家庭内暴力な
どを増大させ、また、仕事
がなくなったことからのス
トレス、圧迫感が積み重なっ
て、心の病気となったりみ
ずから命を断つ人がかなり
例年より増大した。

単なるステイホームは、夫
婦や親子の双方が、うんざ
りするという人も多い。

しかし、霊的なステイホー
ム(キリストの内に留まる
こと)は、いつまでもその
内にとどまり続けても決し
て飽きることがなく、留ま
りつづけるほどに主の平安
が与えられ、そこにあらゆ
る祝福のもとがある。

また、リモートということ
について。

現在の日本の状況において、

リモートワークとは、会社
に出勤すると、電車、バス、
会社などでの感染の危険性
が高まるゆえに、自宅など
会社から離れたところで、
インターネットを用いつつ、
仕事をすることを意味して
いる。

しかし、キリスト者にとつ
てのリモートワークとは、
遠くにいる友のことを主に
あつて思い起こすこと、祈
ることである。キリスト者
にとつて最も重要な仕事は、
祈りである。祈りなくては
主とつながることがなく、
主につながっていないれば、
何をしてても自分の考え、周
囲の肉体的な圧力や命令、
風潮、また他人からの賛辞
を期待してするということ
になつてしまう。

祈りなくしては、最も大切
なものー愛や真実、清い心、
苦しみに耐える力等々ば受

けられない。

「求めよ、そうすれば与えられる」と主イエスが言われたとおりである。

それは主は愛であり、全能であるゆえに、その祈り、ある人を真実に祈りのうちで、思い起こすことは相手に届いていると信じることができる。

相手の人がそれに気付くかどうかではない。

キリストもつねに私たちの

そばにきていてくださって、心の扉をたたいてくださっているが、それは気付かないことが圧倒的に多いのと同様であり、また、大空や白い雲、星々、樹木や草花

：等々の自然の深い語りかけもたえずなされていて、私たちが心を開かないかぎり、その自然のさまざまのものからのメッセージに気付かないことと同じである。

新しい一年を迎えるにあたって、ステイホームと、リモートということーすなわち主

の内にとどまりつづけること、そして遠くにあつてもいろいろな人々のことを祈りつづけること：そしてそこから示されることを主の力によってそれぞれが可能など行なっていく一年でありたい。

旧約聖書における「神の友」とキリスト

旧約聖書を通じて、神が特定の人間に対して、「友と語るように」語ったのは、モーセに対する一カ所のみである。

：人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて

語られた。(出エジプト記33の11)

顔と顔をあわせて神が友と語るように、モーセと語ったという。旧約聖書における神とは、正義の神、裁きの神であるから、到底「友」とは考えられないほどのことである。

また、預言者イザヤについて聖書の記すところを見てみよう。

イザヤは、その生涯において、天が開けて神を見るという特別な経験を与えられた。

それは大いなる神の特別な賜物であり、恵みであったから、本来なら、おおいに喜び、神に感謝すると思われるが、それとは全くことなり、次のように言った。

：「ああ、私は滅ぼされてしまう。」

私は汚れた民の中に住み、汚れたことを言う者なのに、わが目は、すべてを支配されている主なる神を見たからだ。(イザヤ書6の5より)

それほど、当時のユダヤ人たちは神を見ることはできない、もし見るなら滅ぼされてしまうという考えが深く浸透していた。それにもかかわらず、イザヤには、神を見るといふ特別な体験が与えられたし、モーセには神と顔を合わせて見て、神の言葉を受けたのだ。

(*) 友と訳された原語(ヘブル語)は、レーア(Leah)であり、ギリシヤ語は、フィロス(Philos)である。フィロスは10数回新約聖書で「友」という訳語で用いられ

ている。この語は、philéo フィレオー(愛する)に由来する。

なお、「友」を意味する英語 friend、ドイツ語の Freund (フ

ロイント)の語源は、古くさかのぼると、* priv-out-、すなわち、

Loving (愛している) を意味する語に由来する。これは、語根が

* pri- (愛する) という語の現在分詞の形である。(英語語源辞書による)

さらに、アブラハムについても、彼が神の言葉を聞いてそれに従い、息子イサクを神に捧げようとまでしたことによって、「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」という聖書の言葉が成就し、彼は神の友と呼ばれた。」と記されている。(ヤコブ2の23)

こうしたいずれの場合にも、神の友とは、神の言葉を受けてそれを信じて受けとる者に対して言われている。

この世の友は、世間話をする

る友、酒のみ交わす友、釣りなどの娯楽、スポーツなどをする友である。

それに対して、最も高く深い友とは、神であり、そこから、神の友といふべき人がそれは、神の真理を信じて受けとった人のことである。聖書に記されている真理こそは、無限に偉大、深淵な存在である神と人を友のようになし、人間同士の友も神の言葉を仲立ちとする関係こそが、真の友ということになる。

さらに、書かれた文字の書である旧約聖書は、万人の書であつても、言葉の壁があり、同じように理解できるとは限らない。

しかし、神の直接の言葉は、私たちがだれでもが、受けることができ、それゆえに、神の友となれるような道が開けている。

旧約聖書続編には、神の友について次のように記されている。

：叡知は人間にとつて無尽蔵の宝、それを手に入れる人は神の友とされ、知恵のもたらす教訓によつて高められる。

：叡知はひとりであつてもすべてができ、自らは変わらずにすべてを新たにし、世々にわたつて清い魂に移り住み、神の友と預言者として育成する。(知恵の書(「ソロモンの知恵」) 7の14、27より)

信じて、その程度の差はあれ、聖霊を受けた人は、みな神の友なのである。

また、自然のさまざまの事物に關しても同様なことが言われる。

詩編の最後の部分に、次のような天地の万物が神を賛美することが記されている。

日よ、月よ、主を賛美せよ。輝く星よ、主を賛美せよ。

主は命じられ、すべてのものは創造された。

地において 主を賛美せよ。海に住む竜よ、深淵よ、火

よ、雹よ、雪よ、霧よ

御言葉を成し遂げる嵐よ、山々よ、すべての丘よ

実を結ぶ木よ、杉の林よ、野の獣よ、すべての家畜よ 地を這うものよ、翼ある鳥よ、

地上の王よ、諸国の民よ、

君主よ、地上の支配者よ
若者よ、おとめよ、老人よ、
幼子よ。

主の御名を賛美せよ。

主の御名はひとり高く

威光は天地に満ちている。

(詩編148篇より)

このように、天地万物―星々
から、雪や霧、雲、そして天
地乗の嵐や山々、樹木、動
物たち、鳥たち、そしてさ
まざまの国々の王からその
民族、そして若きも老いた
ひとと、：

この宇宙の広大な空間に存
在するすべては、じっさい
に聞く耳ある人には、その
賛美の声が聞こえてくる。

自然のさまざまのものは、
一見、沈黙しているように
みえるが、実は神の直接の
創造物ゆえに純粹に神への
賛美ができる存在であり、
じっさいそれらは神への賛
美の言葉を発し続けている。

それゆえ、それらもまた神
の友であるということにな
る。

神の友、それは神のご意志
を信じて受け、それに従っ
ていく者である。

このことは、本当の父母、
兄弟、姉妹とはだれか、と
いう新約聖書でイエスが言
われたことにつながる。

主イエスは、次のように言
われた。

：だれでも、わたしの天の
父の御心を行う人が、わた
しの兄弟、姉妹、また母で
ある。― (マタイ12の50)

真の友たることは、共に神
の言葉を信じて受けとるこ
とであったが、真の兄弟姉
妹、父、母というのも、神
のご意志―言い換えると神
の言葉を知らされて、それ
を行なう人だと言われている。

る。

神のご意志をはっきりと知
らされて、それを行なうと
いうことは、御言葉を信じ
て受け取り、そこから聖霊

を与えられて、小さきレベ
ルであっても、その聖霊に
導かれ、必要な力を与えら
れてなすべきことをやって
いくことである。

このようにして、私たちは、
生きて働いておられる神の
友とされ、また友であるに
とどまらず、キリストの兄
弟、姉妹、また母となると
いう驚くべきことが言われ
ている。

キリストは、二千年前の十
字架で処刑されてのち復活
し、それ以後は、聖霊とし
て、私たちのあらゆること
ろにいてくださっている。
このように、キリストは、
神や聖霊と同じ本質の存在
であり、そのような無限の

存在たるキリストが、私た
ちが兄弟、姉妹ともなつて
くださる道が指し示されて
おり、それは不可能のよう
にみえるが、私たちにとつ
て不可能なことをキリスト
は言われることはない。人
間にはできないが、神にで
きないことはないのである。

そこに愛がある。私たちは
実に卑小な存在であり、罪
にもまれる身であり、主の
赦しをつねに願い求めてい
く弱い存在でしかない。そ
のようなゼロに等しいよう
な存在であるものを、キリ
ストの友、そして兄弟姉妹
とまで言つてくださる。

小さきもの、とるに足らな
いものを、かくまで引き上
げてくださるキリストは、
ほかのいかなる存在にもま
して、比類のない存在であ
るのをあらためて感じさせ

られる。

友の重要性は、古代中国の代表的思想家であった孔子も、それについて深く思うところがあつたと考えられる。それゆえ、その孔子の論語の巻頭にそのことが記されている。

学びて時にこれを習う

また悦ばしからずや

朋(友)あり、遠方より来る

また楽しからずや(「論語学而第一」)

学び、繰り返し習う、経験を通して

それは喜ばしいことだ(悦ばしからずや)強くやさしく語りかける表現、「や」は詠嘆の心をあらわす、何と喜ばしいことか!

学びの友が、遠くから来て

ともに学びあい深めることは、
は
楽しきことだ。

(悦は、自分一人で喜ぶ、
楽は、その喜びがあふれて
周囲にも伝わるほど)(新
釈漢文体系「論語」明治書
院刊より)

友という言葉でまず思い出

すことは語り合うということである。この孔子の言葉も、共に語り合い学びあうことの幸いを記している。

人は、一人でも書物で学ぶことはできる。しかし、その場合にもその著者との対話によって学んでいるのである。全く一人では、学びを深めることはできない。

信仰も同様で、主イエスがふたり、三人主の名によって集まるところには私も共にそこにいる、と言われたように、また12弟子をつね

に伴っておられ、ともに歩むことの重要性をみずから示されたのだった。

言葉というのは心から出ることであるから心が一致する時にはおのずから言葉が出されてその言葉によってより深くまた喜ばしいことに繋がっていく。

語り合おうということは人

間同士ならごく当たり前のことであるが、しかし動物においても人間と語り合うこともできるようにみえる動物もいる。例えば馬や犬は最も人間の気持ちがかかる人間の目を見て話すとも言われたりする。

確かに昔から馬や犬は人間にととても親しく犬に関する実際の物語例えば愛犬ラッシーとか馬であれば黒馬物語といったものもある。それらを見ると本当に賢い犬は、どことなく人間と

語り合い人間の心がわかるような場面がある。

私の家でも、子供のときから犬、ネコ、ニワトリ、兎など多様な動物を飼っていたが、こちらが愛をもって接すると、そうした普通の動物でも人間の感情の一部ではあっても感じ取っていたのを思い出す。

しかしながらそれらの動物は、せいぜい目に見えるものとしか、しかも、非常に不十分な形でしか語り合うことはできない。

けれども人間にはそうした他の動物には決してできないこと、目に見えない存在と語り合うことができるという能力を与えられている。人間は、霊的存在である神のかたちに似せて創造されたからであり、それゆえに、すなわち目に見えない存在と語り合うことができるよ

うに造られている。

そのような目に見えないものとの語り合いにおいて、目には見えないけれども本当に存在していて、しかも愛であり真実でありさらに全能でもある神様との語り合いということが一貫して書かれてあるのが聖書である。

創世記の最初から真理そのものである神は人間を創造し、その人間に語りかけること、その神と対話するということが記されている。

それは自然科学における数学的、物理的な真理とは全く異なっている。

そうした科学的な真理、それは人格的な語りかけは決してすることはない。人間の悲しみや苦しみと全く無関係にそうした法則は存在している。

聖書で記されている神様は、

生きて働く人間のよう、悲しみや苦しみをまた喜びといたたことを全て分かった上で私達人間と会話をされる存在である。

そして人間同士の会話と根本的に異なるのは人間同士の語り合いは、政治や社会問題など、あるいは、他人のこと、自分のこと、病気のこと：等々。それらは、人間の考えを交わすことであり、政治や社会に関する批判的、評論的な会話の場合もあれば、単に一時的な気晴らし、遊び、雑談：そのような会話である場合も多い。

しかし、聖書に記されている神との対話、それは、真理にかかわる内容であり、また生きるか死ぬかという差し迫った苦難や悲しみのおりに発せられた叫びであり、切実な祈りである。

そのことは、そうした神との語り合いが最も深くなされている旧約聖書の詩編を見るとよくわかる。

そのような語り合い、会話は、最もこの世では魂に響く対話であり、生きる力の根源となる言葉の交流となる。そしてうまく言葉に出すことのできない聴覚障害の方々においても、言葉にならない言葉をもつて神に向かい、祈ることはできる。

私たちが、真剣に神様との語り合いをしようとすると

きには、何も妨げはない。ベッドで動かない状態になつたとしても神様との対話だけは可能である。神様の方から何も語りかけてくださらないように見えても、精一杯の真実を込めて語りかけるあるいは叫ぶことはできる。十字架上のキリスト

が激しい死に至る苦しみの

中から、「神様、神様、どうして私を捨てたのか」と叫ばれたことを思い出す。

そのように生きた語りかけや叫びを投げかけることができ、かつそれに生きた応答をしてくださる神との会話こそ、地上で与えられる最も深い語り合いとなる。

そのような語り合いがなされるとき、それこそが真の友だと言える。聖書において特別に深く、神との対話をするのが与えられたのがモーセであった。

それゆえに、つぎのように、記されている。

：人がその友と語るように、主はモーセと顔を合わせて語られた。(出エジプト記33の11)

そして、このような神の友としていただいた人間はどのような生活となるのである

うか。その一端は詩編にある次の言葉に現れている。

：私は床の上であなたを思
い出し、夜ふけて私はあな
たを思う。(詩編63の6) (*)

(*) 新共同訳では、「あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします」とあるが、口ずさむとは、「何となく心に浮かんだ(詩歌の)文句を、軽く声に出す。」ということ、この詩の前後を見ればわかるように、この詩の作者は、神への助けを求めて渴ききつた大地のように衰え、敵対者に命をねらわれているという状況であって、軽く口ずさむといったことは異質のことである。

これは、つぎの英訳に見られるように、「深く心に思う、瞑想する、黙して祈る」というのが本来の意味であると考えられる。

• When I remember You on my bed, I meditate on You in the night watches. (KJV)

• I lie awake thinking of you, meditating on you through the night. (NLT)

• when I think of you on my

bed, and meditate on you in the night; (NRS)

また、次のように、夜に書いても、神への祈り、賛美がおのずから生まれるという状況になる。

• 昼には、主が恵みを施し、夜には、その歌が私とともにある。

私のいのち、神への、祈りが。(新改訳)

真実かつ愛に満ちた神を信じ、魂の深いところからの神への祈り、語りかけがなされる時、神の友となる。

聖書に記されている神は、天地宇宙を創造した神であり、その創造の力や、洞察、美、永遠性や純粋性、その高さ、広さ、深さ…等々あらゆる点で無限大の存在である。

そのような神が私たちの友

となつてくださるなどということとは考えられないことである。

しかし、神は全能でかつ計り知れない愛の御方であるゆえに、私たちの罪を赦し、信じるだけで、あたかも罪なきかのように扱ってくださる御方であるゆえに、そのような通常不可能なことも可能として、現実にしてくださる。

神をひとたび友とするとき、神の創造物―天地にひろがる大空や雲、太陽、星々、そしてあらゆる動植物の一つ一つさえ、友としていた

だくことになる。

この世にもそうした神など存在しないと思うときには、何も本当に信じるものがない、自分を追い詰めるような状況ばかりが取り囲んでくるように思える。この世が闇であり、汚れていて悪

が支配しているように思えて人間とも会うのを恐れるようになつてくる。そして最後は死という闇、得体な知れないものに呑み込まれていくということになる。

そのような、重く暗い見通ししか立たなくなる状況から解放され、いかなることも生じようとも神が友となつてくださっている、そして、その全能と愛の力によって私たちがそうした絶望的な状況から救いだしてくださると信じることによって、そこから解放されることにつながっていく。

それは、数千年にわたって無数の人たちが経験してきたことである。

そうした生きて働いてくださる神を友とすること、互いに霊的な言葉を語り合い、その力を受けるために必要なことはただ一つ、そ

これは、すでにいまから二千年五百年ほども昔に言われたことがそのまま現代の私たちにもあてはまる。

：地の果てのすべての人たちよ、

私を仰ぎ望め、
そうすれば、救いを得る。

(イザヤ書45の22)

差別・区別・選び

人間は、さまざまな理由で人を差別する。この世は至るところで、差別に満ちている。

差別とは、地位や男女、民族、生まれ、知的能力、経済的能力、健康、病弱、体の障がい、年齢、学歴…等々によって人をより低くみなしたり、見下し、地位や待遇等々においても、不当な

対処、言動をすることである。

区別は、男女の衣服、肉体労働において女性は重い物を扱う仕事は避けて男性にまかせる、出産手当で、障がい者への年金、保障制度など、また健康者と障がい者、病者では仕事においては、その病気や障がいの状況において区別されるし、仕事の能力においても賃金も違ってくる。重いものを運んだりすることは、病者や下肢障がいの人にも難しいことである。

また、耳の聞こえない人には、電話での対応の仕事ができないし、目の見えない人には、観光ガイドやホテルや商店などでの客の対応の仕事は難しいから、そのような仕事を任せることはできない。これは差別ではなく、区別である。

聖書に記されている神は、差別でなく区別される神である。

人間のように、差別する一何かにおいて少ない能力しか与えられていない者を冷たく見放す、見下したり、踏みつけるような言動をすることはない。

ある人は、知的学習やスポーツに、また音楽や絵画などの特別な才能あり、また運動能力あり、数千メートルの山々をも重いリュックを背負って踏破できる体力があり：実に千差万別の違いがある。

これは、神様の御計画の違いによって生じた区別である。それぞれが、別々の仕事、なすべきことを神が御計画されているからである。このように、人間には実にさまざまな状況にある人たちが存在し、限りなく違い

がある。それは、神が差別するためでなく、それぞれ状況に置かれた人たちに、神のわざを証しさせるためのできごとだと言える。

神がなさるそうした区別を、選びということが出来る。健康な人、病弱な人、目の見えない人、：等々は、神様がそのように選びとつたのである。

こうしたことを現実のできごととして記されているのが、次のよく知られた箇所である。

：イエスは通りがかりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。

弟子たちがイエスに尋ねた。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」

イエスはお答えになつた。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。」

神の業がこの人に現れるためである。(ヨハネ9の1〜3)

生まれつきに全盲というきわめて苦しい状況でさえも、それはマイナスのことではなく、神がその大いなる働きを世の人々に証しするためなのだと言われた。

これは、おどろくべき発想の転換であつた。

それまでは、生まれつき全盲とかがろう啞であること、足が立たないない、などということは、本人、または先祖の罪の罰、あるいはたたりだとみなされ、不吉なことだというのが、どこの世界においても一般的な考えであつたであろう。

とくに、世界的に恐れられ

ていたのが、ハンセン病であつた。日本の江戸時代において、ハンセン病のことを、「業病」「天刑の病」、さらにその病氣にかつた人を、「三千の仏神人に憎まれたる業人」とまで言われ、このような言葉が、浄瑠璃の中で用いられるようになったという。

そのような時代に、ハンセン病に冒された人たち、その親族の人たちの苦悩や悲しみ、絶望はいかばかりであつたろうと思われる。

新約聖書のマタイ福音書において、イエスの「敵を愛せよ、迫害する者のために祈れ」というような崇高な教えが5章から7章まで、長く記されたあとに、まず記されているのが、一人のハンセン病(らい病*)をわずらっている人にイエスが近づかれた記述である。

そのハンセン病の人は、イエスに対し、「主よ、御心ならば、私を清くすることがおできになります。」と告白し、当時の医者、宗教者などいかなる人もできないことを、イエスだけはできるとの確信を告げた。

そのる信仰ゆえに、イエスは、その病人に手を差し伸べてその人に触れて、「よろしい、清くなれ!」との言葉を発せられた。

ただそれだけで、そのハンセン病はたちまちいやされて清くされた。(マタイ福音書8章1〜3)

この記述は、イエスはさまざまな病氣―盲目や、聾啞、精神の病氣、また肢体の障がい等々、あらゆる病氣をいやされたという記事の第一に記されている。

それは、この *lepra* (レプラ) と表記された病氣が

それほど重大であり、旧約聖書以来、その病人には触れてはならない、隔離するのだ、とのきびしい戒めがあつたことが背景にある。

このレプラにかかると、悪化すると耐えがたい悪臭を伴い、皮膚がさまざまに変形変質し、顔面にも現れるこめに正視できないほどとなるので顔を布で覆うようになったり、さらに失明、手足などの切断など、そして皮膚の全体に感覚がなくなつていく…、そのうえに、家族や近くに生活する人に感染させるということで、一家の破滅となる―そのような恐るべき病氣であつた。主イエスは、旧約聖書がきびしく禁じていたそのような病にみずから手を触れ、いやされたということ、は、旧約聖書の戒律のなかで生きてきた当時の人にとつ

ては、目を見張る驚くべきことだったのである。

そして、その癒しによって、神と同質のキリストがどのような御方であるのかが、明確にわかるように証しされたのであった。失われた一匹の羊を探し出して救うためにこの世に來られたキリストのじっさいの生きる姿が浮かび上がってくる。

どんなに恐るべき病気であっても、なおそれをも神のわざのあらわれるためだとされていたのがこの例でうかがえる。

(*) 原語は、Lepra (レプラ)。このギリシャ語は、ヘブル語のツアラートの訳として70人訳聖書(ギリシャ語訳聖書)に取り入れられ、新約聖書でも用いられている。そこから、ラテン語や英語、フランス語 (Lepreux)、スペイン語 (Leproso) など各国語にも用いられるようになった。旧約聖書での原語は、ツアラートで、人間以外の物にも特異なカ

ビのような変色腐敗が生じることにも使われているし、人間でもこのツアラートだとされても治る人もあったから、ある種の皮膚病にも使われた用語だと言える。それゆえに、この後は、後のらい病とはかならずしも一致しない。

そのようなこともあって、新改訳聖書では、日本語に訳することせず、このツアラートという原語のままにした。

しかし、そのようにツアラートというヘブル語のままにすることによって、聖書を読む人が何の病気のことなのか意味不明となってしまう、じっさいにハンセン病であった人の苦しみがいかに深刻なものであったのかがわからなくなる。新共同訳や若干の英訳のように「重い皮膚病」などと訳されると、人間の重篤な病は、皮膚病よりはるかに、ほかの内臓の心臓や脳、肺：等々の重い病気はいくらでもあるから、なぜ聖書で、皮膚病というそれほど致命的ではない病気を、旧約聖書から新約聖書のマタイ8章の冒頭も含め、きわめて重大視しているのかが説明できなくなる。

さらに、二〇一八年に発行の、聖書協会共同訳では、「規定の病」と訳したが、これでは何のことか、だれがわかるであろうか。なお、英語訳の大多数は、らい

病人 Lepra (レプラ) と訳されており (一部は A man with Leprosy、らい病にかかった人)、一九九五年岩波書店から発行された新約聖書でも従来からレプラの訳語として用いられてきた「らい病人」と訳されている。

また、聖書においては、そうした特別に重荷をになつた病気や障がいのある人たちとは別に、アブラハム、モーセ、ダビデ、サムエル：のさまざまな預言者たち、それらの一人一人を選んで、特別に歴史における大切な存在として区別され、その生きた証しは世界の歴史に刻まれている。

しかし、そのように無数の人たちに影響を及ぼすように選ばれ、区別して取り扱われた人たちはごく一部である。大多数はそのような目立った働きなどできない。しかし、すべての人間は、何らかの能力が多く与えら

れている人、少ない人、全くないような人、それぞれにかけがえのないものとして区別して創造されている。

神は、愛であり、全能であるゆえに、そのような小さな存在をも選んで、それぞれに区別して性格や容姿、体力、能力をも与えておられる。それぞれが世界で唯一の存在として区別され、それによってそれぞれが独自に神に創造された証しをしていくためである。

それは自然界にも見られる。小さな木、クスノキやエノキ、松、杉：等々の堂々たる大木もあれば、わずか10cmほどの木―例えば東北や北海道の高山に生えるエゾツツジ：じつにさまざまである。

それらの違いは背丈が大きいかから尊いのでなく、神がそれぞれに神のわざを現わ

していくために、そのように千差万別の姿をとっている。

植物や動物などの世界では神様の創造の多様性の意味が理解できる。しかし、人間世界では理解できないという人たちも多い。

それがわからないときには、神の愛と全能、そのはかりしれない叡知のゆえだと信じるのである。頭でわかった、というのなら信じる必要ない。わからないからこそ、信じるのである。

：信仰とは、望むことを確信し、まだ見えていない事実を確認することである。信じることによって神はその褒美として、信じたことが事実であることを確認できるように導いてくださる。

(ヘブル書11の1〜2)

差別とは愛なきあり方である。選びは深い愛によってなされることである。

ハンセン病の人を差別する。感染する危険がある、感染すれば治らない、生涯の恐ろしい不幸となる―それゆえに、普通の人間とは別扱いとし、家族から、地域からも隔離していく。

差別とは根拠なき区別であり、愛なき区別である。

しかし、選びはかえってそうしたハンセン病や全盲、ろうあ者といった世間から差別され見下されていた人々たちを選んでそこにキリストは近づき、癒された。

神の愛は、そうした人々をかえって選んで区別して心を注がれたのである。

放蕩息子、失われた一匹の羊のたとえ話しは、そのことを表している。きちんと仕事をしていた兄にはしな

かったほどのふるまいを放蕩息子が帰ったときにはしてやった。

また迷っていない99匹の羊をそのままにしておいて、失われた一匹の羊を探し求めて救いだす、それは驚くべき仕方だ、そのような人間をまず救われるべき存在として区別し、救うために選び取られたのだった。

差別であるか、区別であるか―それは愛をもつてされるときには区別であり、選びである。

愛なく区別することは差別である。

この世界には至るところで無関心や憎しみ、敵意、無理解、自分中心主義、カネや地位、学歴、生まれ等々、目にみえるものを重視する考えがある。それは愛のない世界ゆえに、いたるところで、差別が生じる。

しかし、そのような世界であつても全く差別のない領域は、二千年前から存在していた。

それは、キリストの福音の世界であり、真実の救いの道に關してであり、次のような個所に示されている。

：そこには、もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隸、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのものの中にいますのである。

：不正を行う者は、自分の行った不正に対して報いを受ける。それには差別扱いはない。(コロサイ3の11、25)

：それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であつて、すべて信じる人に与えられるものである。

そこにはなんらの差別もない。

ユダヤ人とギリシヤ人の差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。

(ローマ3の22、10の12)

唯一の主であるキリストこそは、万民の主である。奴隷もその主人もまた政治家や底辺にいる弱い人たち、また金持ち、貧しい人もみな、同じ主がおられて、語りかけておられる。その万民の主からの呼びかけを信じて心開き、受けいれるときには、だれでもあらゆる学者や権力、カネの地を超えた、神の国の祝福を受けるようになる。

聖書には、奴隷たちもキリ

ストに従うように、キリストの奴隷として、心から神のご意志を行い、人に仕えるのでなく、キリストに仕えるように、喜びをもって仕えよ、と言われている。

また主人たちも、同じように主に仕える心をもって奴隷と対処せよといわれている。それは、主人たち、奴隷たちも共通の主人が天におられ、人間を差別しないからだと言われている。(エフェソ書6の9)

このような奴隷に対する心は、新約聖書で唯一の個人宛てた手紙(ファイルモン書)にも見られる。

この手紙に見られる奴隷、オネシモは、キリスト者のファイルモンが主人であったが、そこから逃げ出した奴隷だった。ファイルモンはパウロの親しきキリスト者の

仲間だった。

オネシモはパウロのところにキリスト教信仰を与えられた。ファイルモンのところでは与えられなかった信仰が、パウロのところでは与えられたのは、奴隷が多くいたであろう状況では、ファイルモンも福音を語りにかつたのであろうと考えられる。しかしオネシモはパウロのことを、ファイルモンから聞いて知っていたとみえる。そのため、逃げ出してパウロのところに行つたと考えられる。

そこで神の御手がパウロを通して働いて奴隷のオネシモはキリスト者となった。

そのオネシモは、奴隷であったのに、パウロは兄弟とみなすと言っている。(ファイルモン書)

:

信仰による祝福された世界、

罪の赦し、死の力にさえ勝利する永遠の命への復活の恵み：等々のこの世で最も価値あるものは、地位や経済的状况、民族や生まれ、能力等々の差別なく与えられる。

このように、ありとあらゆる差別が存在するこの世界において、はるか数千年の昔から、差別のまったくない領域があるとの確言が人間に与えられているのは驚くべきことである。

いまから、一千五百年ほど昔からそのことは次のように言われている。

：地の果なるすべての人よ、わたしを仰ぎのぞめ。

そうすれば救われる。わたしは神であって、ほかに神はないからだ。(イザヤ45

このような、あらゆる時代を通じて、差別のあふれるこの世のただなかにあつて、闇のなかの光として、いかなる人でも差別なく、ただ神を、キリストを信じて仰ぐだけで、救いへと導かれ、ほかの何もかも与えることのできない魂の平安や希望が与えられる。

現代の新型コロナウイルスという、並外れた感染力をもって世界中にひろまつている状況にあつても、その光を失うことなく輝いているのが、この聖書に記されている真理である。
いかなる事態にも動かされることなき天の国から、「この命の道に來れ！」との呼び声が 世界の人々になされている。

コロナと魂の方向転換

去年からの一年、世界の誰もが予想していなかったであろう新しい事態が生じた。新型コロナウイルスの世界的蔓延である。

ウイルスは、細菌よりさらに小さくその10分の1〜100分の1程度の大きさである。細菌の例えば大腸菌は千分の一ミリ程度なので、ウイルスがいかに微少なものがわかる。

一般的には、小さいものは弱いような感覚がある。例えば、百獣の王といわれるライオンは、その姿、体格、ほかのいろいろの動物を襲つて餌食とするなど、堂々として力強くみえる。

しかし、現在は、保護せねば次々と世界の各地に生息

していたライオンたちも滅びてゆき、現在では、保護が必要となつている。アリのライオンのいずれが強いのか子供でもライオンだと言ふだろう。

たしかに、アリはライオンよりはるかに小さいし、子供の指でも簡単に殺されてしまうほど、弱い存在である。しかし、アリは保護する必要なく、現代でも至るところに存在している。

細菌もアリよりはるかに小さく、その本質は強くないゆえに、太陽紫外線で簡単に死んでしまう。

しかし、細菌は世界大戦があるうと、科学技術による自然破壊が進んでも、滅びることはない。保護してやらねば滅ぶということはない。そういう点では、いかなる動物よりも強固な力を

持っている。

さらに、細菌のさらに10分の1〜100分の1程度のウイルス(1万分の1ミリ〜10万分の1ミリ)も、紫外線によってそのDNAが部分的に破壊されて死ぬということがわかつている。

そのような微細な生物とも無生物とも言われるウイルスが、世界中の国々、人々を苦しめている。そしてワクチンができることを待望しているが、通常の従来のタイプのワクチンなら、開発から実用化まで10年ほども要するというところであるが、今回の新型コロナウイルスに対するワクチンはmRNAワクチン(mRNAワクチン)であり、短期に増産ができる。

そうなれば、オリンピック

までに何とか防げるのでは
：？？と政府やオリンピック
委員会などは特別な期待
を持つている。

しかし、変化した新型コロナ
ウイルスも つぎつぎと見
いだされている。

(*) mRNAワクチンに関しては次
のようなことが言われている。

mRNAワクチン(メッセンジャー
RNAワクチン)は、メッセンジャー
RNA (mRNA) と呼ばれる天然化学
物質の人工複製物を使用して免疫
反応を起こすワクチンの一種。ワ
クチンは合成mRNAの分子をヒトの
細胞に導入し、細胞内に入ると、
ワクチンのRNAはmRNAとして機能
し、細胞は通常、病原体(ウイル
スなど)やがん細胞によって産生
されるはずの外來タンパク質を作
る。これらのタンパク質分子は、
宿主細胞を傷つけることなく、対
応する病原体やがん細胞を特定し
て破壊する方法を記憶する獲得免
疫を刺激する。従来のタンパク
質ワクチンに対するmRNAワクチン
の利点は、生産速度、生産コスト
の低減などいろいろある。従来の
ワクチンなら、実用化には10年ほ
ども要していたというのに、今回

のワクチンは1年も立たないうち
に実用化されつつある。欠点と
しては、**見えない**分子が化学的に不安
定であるため、大量の冷凍保存設
備やその運搬の手段が必要であり
そこに欠陥が生じて注射前に分子
が分解すると、効力が損なわれる
ことが考えられている。また、
一部には、どのような副作用があ
るのかも、明確ではないし、自己
免疫反応を起こしやすい人はmRNA
ワクチンに対して副作用を起こす
可能性がある。

こうした極微の生物とも物
質とも言えるものによって
かくまで混乱させられ、死
者も多く出るというのは考
えられたらどうか。

自然に帰れ! との深いメッ
セージがその背後に隠され
ている。

アフリカでのデボラ出血熱、
マーズ、サーズなども、人
間が本来生活する場でない
森林を切り開き、自然を破
壊していくなかで、動物が
持っていたウイルスが人間

に感染するということが根
本にある。

そしてワクチンを造っても
新たな新型コロナウイルス
が生じてその感染力、致死
率、後遺症などが強く、力
があるのが発生するならば、
ワクチンが効かなくなつて
しまう。

ここに至って、人間が自然、
そして自然が私たちに語り
かけているものに注目する
ことが期待されている。

自然的なことと逆の映像、
いろいろな爆発物や存在し
ない反自然の人間を造り出
し、その人間が破壊行為、
殺人や爆発等々、流血、破
壊、炎上等々の反生命的な
行動によって観客の表面的
な目を惹こうとする。

そのようなアニメのマンガ、
映画に2千万人もの人が見
に行く、わずかの期間に3

00億円もの興行収入を得
たということのなかに、過
激な映像によって快楽をえ
ようとする方向が、現代の
人間に浸透しているのを感じ
させる。

こうした状況、方向性は、
今後の人間にとって暗いも
のを予見させる。自然のう
るわしい美しさ、静けさ、
樹木の風にゆられる音、自
然のそよぎ、小川の流れる
音、大きい河の雄大な力、

海のその深い色と大波の力、
破壊力、また青く澄んだ大
海原の豊かな青い広がり：
等々、海は実にさまざまの
深い世界を私たちに告げて
いる。

また、海がない地方では、
山々の雄大な不動の力、そ
してその緑の、遠くの青い
色合いの山なみの沈黙せる
姿…、大空の青く澄んだ広

がりとそこに描かれた、日替わり、刻々とかわる青と白、また灰色や赤、黄色、橙色、…の大空に刻々と描かれる立体的絵画、それは無限の美と力を持った神ご自身の製作であるゆえに、無限の奥行きとそこからのメッセージが、神の言葉がそこに秘められている。

アニメの世界の騒々しさとさまざまの破壊や攻撃等々と沈黙せる自然の世界は実に対照的である。そうした自然のただなかにあって、種や苗から大いなる野菜などが収穫されるようになり、食物を生み出す一等等々、これらすべては自然の持つ無限の力を私たちに日毎に新たに示していきる力にほかならない。

私たちは、生きるのに不可欠な食物生産も自然の力によっているし、自然の持つ静けさや美、雄大さや清さ、力強さといったものが目にみえるかたちで日々私たちの眼前に提供されているのであって、それも私たちの心の栄養として不可欠なものである。

今日のウイルスの蔓延とその力は、私たちに自然の力の根強さを思い知らされるものであるが、それはまた、すでに述べた自然の持つその無限大のさまざまの良き力が神の創造のゆえであり、その根源である神の力へと立ち返るようにとの深いメッセージがこめられている。

報告

○元旦礼拝

例年は、徳島聖書キリスト集會にて、午前六時半から開会でしたが、今回はオンラインで、会場に集えない県内外の方々、二十名を超える方々が参加し、新年の最初の日を御言葉を中心として始めることが与えられたことが感謝でした。

○冬季聖書集會

1月9～10日に開催された冬季聖書集會は、キリスト教独立伝道会主催で、例年は、横浜市の郊外の山地にある森の家での開催でしたが、今年はオンラインでの開催となりました。

従来とは大きく運営も変化しましたが、オンラインのゆえに、参加者も部分参加を含め、

80名を超える方々が、北海道から九州まで日本の各地からとなり、それまで未知であった方々とも主にあるよき学び、祈り、賛美の交流となりました。

一年前までは、誰一人このような形での開催を予想していなかったのですが、神のなされることは、常に人間の予想を超えるものであることをあらためて知らされたことでした。

コロナで苦しみ、困難に陥っているたくさんの方々が世界に増え続けています。そのような方々が、いかなる人にも真剣に求めさえすれば与えられる真実の助けー唯一の神からの助けを受けてその困難から導き出されますように願っています。